

〈指導教員推薦文〉

助教授 池 埜 聡

高柳奈生・辻尾佳澄「犯罪によってきょうだいと死別した子どもの人間的成長をどう支援するか」

高柳奈生、辻尾佳澄両名の卒業論文執筆ならびに本稿出版についてご快諾いただき、いつも二人を励まして下さったご遺族にこの紙面をお借りして心から感謝申し上げます。

本論文は、ある犯罪被害者遺族に対する支援の事例研究を中心とした「臨床論文」である。指導教授（池埜）のネットワークから被害者支援が展開され、著者の高柳奈生・辻尾佳澄両名は、遺されたきょうだいへの保育支援を中心に、事件後から今日にいたる1年8ヶ月の間、定期的にボランティア・ベースで遺族とかかわりをもつことになった。この論文は子どもの心理的反応と成長過程を理論モデルから検証し、犯罪被害によってきょうだいを失った子どもに対する臨床的示唆を導き出した貴重な研究といえる。

研究デザインは、シングル・ケース・スタディー法を採用。犯罪被害によるきょうだい喪失を経験した子どもはあくまでも特殊事例（special population）の範疇にある。その意味で、数量的研究が及ばない、参与観察法および直接観察法に基づく in-depth analysis を施した質的調査研究としても位置付けることができる。

本論文の優れた点として、第一に論文の構成要素、特にケーススタディー法に基づく臨床論文の要件を全て満たしており、高い完成度を獲得していることが挙げられる。具体的には、1) きょうだい喪失のインパクトと死別反応および被害者家族に関する理論的枠組みに焦点を当て詳細に文献レビューが行われている、2) 参与観察、直接観察による子どもの情動・行動に関するデータ整理が詳細である、3) 分析が理論モデルおよび実践モデルとの比較検証によって検証されている、4) 分析結果から実践的示唆（practical implication）が具体的に提示されている、といった点が挙げられる。データのまとめ方や焦点付けの方法については洗練させる余地があり、さらに文献レビューと事例分析との連携について未消化な部分もあるかと思うが、徹底的な文献レビュー、徹底的なデータ密着・データ対話に基づく臨床分析を課した指導教授の責任によるところも大きいと反省している。

第二に、「犯罪被害によってきょうだい喪失を体験した子どもの人間的成長」という極めて特殊な事例を扱った臨床論文であるという点が挙げられる。犯罪によるきょうだい喪失が子どもの成長に及ぼす影響についての理論的・実証的研究は、トラウマ研究分野でも初期段階にある。まして、1年8ヶ月にわたる時系列分析を質的に実施した研究は皆無に等しい。子どもの行動分析および実践的示唆は、臨床的そして学術的に貴重な情報をもたらしたといえる。

第三として、支援者である高柳・辻尾両名の「自己覚知」が得られ、冷静に分析が行われている点である。被害者支援で最も困難な点は、支援者自身がバーンアウトや代理受傷など負の影響を受けてしまいかねないことにある。きょうだいの遺影を前にご家族の痛みに向き合いながら、継続的に子どもの援助に携わった若き支援者の二人。心理的負担と自らの変容にあえて直面するのみならず、「それら自分達の変化が子どもの支援にどのように影響しているか」という、あくまでも子どもの利益と尊重という価値に基づいて分析している。

第四に、倫理的配慮を充分に行っている点である。この論文は、支援に携わった子どものご両親の同意はもとより、むしろご両親の進言によって二人は作成の意志を固めた経緯がある。「ぜひ私たちとこのことを書いてね。」深い信頼関係がなければこのような進言は得られないはずである。プライバシー保護を中

心に、あくまでも子ども・遺族の利益に基づく配慮がなされていることは、論文作成者としての基本的要件を満たしている。本稿出版についてもご両親に事前に読んで頂き了解を得ている。

最後に、支援した子どもそして家族への思いやり（compassion）に裏付けされた論文であることが挙げられる。ご遺族の痛みに決して情動的に流されず、しかし子どもと家族への共感や暖かさ、そして「少しでも力になりたい」という純粹さを行間から読み取れる。あらゆる知識、経験、そして努力を動員して書き進もうとする二人の「熱意」なくしてここまで詳細な観察と分析は得られなかったと思われる。

これはあくまで余談だが、本論文作成にあたり、二人は宿泊者が誰もいない関学スポーツセンターに数日間泊り込み、データ整理と分析にあたった。その後もお互いの自宅に泊まり込み、二人が呼応する形で情報整理がなされ、分析が深められた。深い思いやりなしにはここまでがんばりぬくことはできなかったであろう。

筆者らは社会福祉学科一期生であり、最初の卒業生である。社会福祉学科のモットー、3C（comprehensiveness, competence, and compassion：広い視野、卓越した実践能力、人への思いやり）を見事に集約した卒業論文となった。「実践の関学」「臨床の関学」と呼ばれてきた関学福祉の伝統にふさわしい、ミクロ実践に関する臨床論文である。第一期生から臨床ソーシャルワークの質の高い論文が完成されたことは、後輩たちへの力強いエールになると確信する。

追伸

本稿は、紙面の関係上、卒業論文の原著を約5分の1に集約したものである。質的データや分析結果については、論文の主旨を損なわない範囲で、一部分に限定されていることをご了承いただきたい。